series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第二章

Homecoming

峯村　明

リ・コンストラクション

登場人物
2・Homecoming
077.
078.
079.
080.
081.
082.
083.
084.
085.
あとがき
奥付

登場人物

桧山 健	21歳の大学生
ウィリアムス父子	健の顧問弁護士　父はセオデリック　息子はデビッド
ウィンディ・サトウ	ウィリアムス法律事務所に勤める若手弁護士
カヤ&アイラ	ホテル《ミッドランタ》の管理人夫妻

2・Homecoming

077.

　軽快なマーチが街に流れている。シンプルなメロディラインはふしぎなほど親しみ深く、一度聴いたら忘れられない。ついつい、♪Waltzing Matilda、Waltzing Matilda♪、と、リフレインが口をついて出、足取りも軽くなる。

　オーストラリア連邦・南オーストラリア州・アデレード市。
　ここが桧山健の故郷。もの心つかないうちにここを離れた彼には、故郷だという感慨はない。ただの見知らぬ街。
　だが――
　一見、楽し気なマーチ、"Waltzing Matilda"を聴いていると、祖先を思わずにいられなくなる。
オーストラリアにおける彼の祖先がこの国へやって来たのは、1925年だという。百年前のことだ。

078.

　19世紀、オーストラリアは流刑地だった。
イギリスから犯罪者とその監督者が送られてきた。監督者のなかには広大な土地を占有して家畜を飼い、そこで囚人を働かせる者がいた。土地、家畜、労働者を私物化したのだ。

やがて金鉱が発見され、欧州やアジアから自由移民が大量に押し寄せ、統治の態勢は植民地化へと急速に変貌していく。
鉄道や銀行といったインフラが整って支配層・富裕層が形成されていくなか、元囚人とその子孫＝労働者は恩恵を受けることがなく、貧困層と化し、やがて家畜強盗に転落する者がでてきた。
富裕層は家畜強盗を危険視し、取り締まりと逮捕のために警官と手を組み、警官へは報酬がばら撒かれた。
（ "Ned Kelly" Wikipediaより ）

"Waltzing Matilda"は、貧しい放浪者が羊泥棒を働き、牧場主と警官に追いつめられて沼に飛び込んで自殺する、というもので、上述のような時代の背景そのままである。郷愁を誘うメロディの美しさと語られる放浪者の物語とのギャップは大きい。

曽祖父にあたる桧山正太郎がこの国に上陸した1925年は、移民制限法の真っ只中で、白人以外は入国が非常に難しかった時代だ。彼はどうやってか入国し、人種差別も激しかっただろう土地で生き、子を成し、孫である光一氏は事故で亡くなった。光一氏の一子・健は日本で長じ、その遺産を継ごうとしている。

もしかしたら曽祖父は、Waltzing Matildaの主人公のように、毛布（matilda）をかついでたったひとり、あてもなく方々をさ迷い(waltzing)、時には犯罪にも手を染め、警官に追われたのではないだろうか。沼に身を投げこそしなかったが、それがふしぎではない時代だったはずなのだ。

どうやって生き延びたものか、曽祖父は記録を残していない。健の実父、その父と、三世代の軌跡をたどるのは難しい。
Waltzing Matildaのメロディに身をまかせて、ただ想像してみるだけである。

079.

アデレード市はビクトリア女王（イギリス・1837年～1901年）治世の時代に、機能性と美を兼ね備えた『理想の都市』として建設された。[1]
整然と区画整理された街のなかに息をのむほど風情のある建物が納まり、人々はそこで日常生活を営んでいる。

---

[1] アデレード市の建設開始は1836年。
『アデレード』はウィリアム4世（在位：1830年 - 1837年）の王妃（1849年没）。この夫妻は子に恵まれず、ウィリアム4世亡き後、姪にあたるビクトリアが即位した。
ウィリアム4世には愛妾の子が十人おり、アデレードはこの子たちとたいへん仲がよく、教育にも気を配ったという。

健の父、光一氏は二十八歳で亡くなったが、その時、アデレード・ヒルズに葡萄園とワイナリー、市の中心部に住宅をふたつ持っていた。どれも先代の正悟氏から譲り受けたものである。

ビクトリアパークに近い本邸はずっと無人だったが数年前に、ぜひ貸してほしいという人間が現れ、その裕福な人物が別荘として使いたいというので、相続人（健）が成人するまでという条件で貸してある。

まあ、すぐに返してもらわなくても構わないかな、と健は思う。日本の慎ましい環境で育った彼には、手に負えないほどの規模の住宅だったのだ。

そしてもうひとつ、正悟氏が知り合いから買い取ってホテルとして開業した建物が、市内、トレンス川北側にある。このホテルは名を《ミッドランタ》といい、カヤとアイラという、中年夫婦が仕切っていた。
本邸も《ミッドランタ》もビクトリア調の格調高い美しい建物である。これらを初めて見たとき、健は自分が所有者だと思うと腰が引けたものだが、しだいに見慣れてくれば、祖父の趣味の良さに感心の念が強くなってくる。

《ミッドランタ》の奥まった一番狭いところがオーナー用として確保されていて、健はこれまでにも短期で帰郷する際はここに泊まっていた。

狭いといっても、新城不動産のワンルームマンションの数倍の広さがあって、日本なら一家族が優に暮らせるスペースだった。そのうえ内装は細かいところまで神経が行き届いている。
広いベッドに寝転がって天井を見上げていると、（カネがかかっているなあ）という感想が浮かんでくる。
新城不動産でバイト中、あちこちの物件を見て回る機会があったのだが、どうしても細かなところへ目がいってしまうのだ。新城社長の名誉のために言っておくが、決して新城不動産が安普請の物件を扱っているというわけではない。ただ、比較してみると、資金力の違いというものがありありとしているのである。

もしかしたら……と、健は思う。曽祖父の正太郎氏は毛布をかついで放浪したわけではないかもしれない。それよりも、成功、の観が強い。そうでなければ、子孫がこんな不動産を持てるわけがない。
健はまだ財産目録をよくよく見ていないが、財産はワイナリー、本邸、《ミッドランタ》、それだけではなかったのだ。

さて、と彼は考える。これからどうしようか。

080.

トレンス川を挟んで南側のシティに、ウイリアムス法律事務所がある。祖父・正悟氏の時代からのつきあいで、所長セオデリック・ウイリアムスは老齢の域、その息子、デビッドが今は主力。彼に子どもはいるのだが、皆、スポーツ選手になってしまって誰も家業を継ぐ気はない。

そのためかどうか、最近、新人弁護士が入所した。ウィンディ・サトウという女性。サトウというからには日系かと思えば、スラブ系の名なのだという。たしかに様々な血が混じっているらしい魅力的な容貌。二十代半ばで、桧山より三つ四つ年上の、絵に描いたような才色兼備の美女だ。ミドルヒールのパンプスで桧山の横に立つと、180㌢の彼と肩を並べる長身でもある。

*

健がアデレードへ戻ってきた時、ウィリアムス親子は三週間の出張に出たばかりで不在だった。
老ウィリアムスはかなり口うるさく気難しい人物で、健はひそかに不在を喜んだのだったが、彼の突然の帰郷を知ると、デビッドから電話器ごと横取りし、電話越しにこんこんと説教した。
「なんという無計画さだ！！」というのだ。
そして自分のオフィスに座らせて徹底的に言って聞かせたいことが山ほどあるが今はそれができないことを嘆き、留守中の雑務を任せたウィンディを紹介したのだった。

雑務を任せられたといってもウィンディは法律事務所で修行中の、れっきとした弁護士である。
神秘的な青い目を意味ありげにきらめかせて「友だちは私のこと、〝賢者〟って呼ぶわ」と、年下の健を煙に巻くようなことを平然と言う。自分の能力にも容姿にも相当な自信があるらしかった。

つかみどころがなく、謎めいて、ウィンディという名は吹き抜ける風というより、つむじ風という方が合っていそうだ。
健はこのタイプの女性がたいへん、苦手だった。

081.

「ウィリアムス先生のお話では、あなたの自宅は――」書類の綴りを取り出しながらてきぱきと切り出すウィンディの用件を桧山は引き取った。
「ああ、何年か前から人に貸している。気に入ったからどうしても、と粘られてね」

　ウィンディは書類に目を落としてうなずきながら「ふぅん」と鼻を鳴らした。

「メモがある……え、王族？　まあ、ヨーロッパには大勢いるものね……ああいう人たちは――気に入ればなにがなんでも、どうしても、というでしょうねえ。――それだけ気にいられる邸宅というのもすごいけど――この家賃もすごいわね！　これだけ払えるんならほんとにお金持ちの特権階級なんでしょうね」

ホテルとして営業した、という想定で標準的宿泊料から計算した家賃だから、とんでもなくすごいわけではない。根拠のある妥当な額である。

「それでも貸してくれと粘られて仕方なく貸したんだ。払えなければ空けてもらう」

　ウィンディは肩をすくめた。「王族相手によくもまあ」

「実際に交渉したのはウィリアムス先生だ。オレじゃない」

　老ウィリアムスは先生で、息子の方に『先生』はつかない。ウィンディはくすくすとおかしそうに笑った。

「ウィリアムス先生ご自身、貴族みたいでいらっしゃるものね！　本業の法律のほかに経済にも明るいし。若い弁護士の仲間内では、先生のこと〝ナスダック〟って呼んでるのよ、知ってる？」

「へえ。それは知らなかった」

「ご本人には内緒よ、そんなあだ名つけられたなんて知ったら――」

「ウィリアムスの気の短さだったらオレだってよく知ってるよ。頑固で強情で頭ごなしで——貴族みたいだっていうのは当たってる」

「きっと前世は貴族か王族だったんでしょうよ」ウィンディは笑いながら軽くため息をつき、さらっと言った。

「さあ！　それでは仮の宿まで送るわね。送り届けて居住地を確認するように先生から言われてますの」

082.

　少々距離があるのと、健の荷物があったので、ウィンディは自分で車を出してハンドルを握る。

「先生はあなたのこと、とても買ってらっしゃるわ」

「オレの持ち物は隅々まで知ってるし、顧問料はたっぷり払ってるし。オレに関わっていれば一生仕事と生活には困らないからな」

「——私、そういう考え方好きじゃありませんわ」

「——オレはそれほどいい性格してませんよ。サトウ先生」

「充分いい性格ですわね」

*

　健の〝仮の宿〟に到着すると、ウィンディはもう少しで口笛をならしそうになった。シドニーの学校を出てアデレードのウィリアムス法律事務所にやってきた彼女はこの土地にはあまりなじみがない。見るからに由緒正しそうな屋敷が旅行者に宿を提供しているスタイルはとても物珍しかった。ふたりで正面のエントランスから入ったのだが、ウィンディはきょろきょろしっぱなしだった。

「ほんとにここなの？　住所間違ってない？」

「間違ってない」

「ふぅん――すてきねえ」

　ホールの真ん中に立っておのぼりさんよろしくきょろきょろしていると、どこからともなく中年の女性がひとり現れた。優しげな面立ちを懐かしそうにほころばせ、声をあげた。

「オーナー！」
「どうも」
「お待ちしておりました！」

　中年女性は両手を広げて走るように近寄ってきて桧山の手を取った。それからすがりつくように伸び上がって桧山の頬を手のひらではさみ、接吻する。
「光栄ですわ！　オーナーのお世話ができるなんて！」
「どうぞよろしく」
「ああ、それはもう！」中年女性は本当にうれしそうだ。長雨のあとの太陽のように、全身で喜んで、輝いている。「カヤはちょっと出かけてますのよ。彼もオーナーがここに来てくださること、とても喜んでいますわ！　それでロブスターを仕入れに市場へね」

　桧山は彼女をウィンディに紹介する。「ここの管理人。アイラさんだ。こちらのウィンディ・サトウさんはオレの監視役――」

「はじめまして！　ウィリアムス法律事務所の者です！」いいかける桧山に覆いかぶせるようにウィンディはすばやく前に出てきて、管理人アイラの手を握る。アイラはなんとなくたじたじと身を引いた。

「わたくし、ヒヤマ　ケンの顧問を代行するよう申し付かっています。アイラさん、彼をよろしくお願いしますわ！」
「も、もちろんですわよ……」
「居住地は確かめたんだからきみの役目はいちおう済んだんだよな」
「ええ。ホントはお部屋も確かめておくように言われてるんだけど、そこまでする必要はなさそうだわ」
「……」
「今日の私の仕事はここまでね。あら！　あの奥はレストランね？　今夜のメインディッシュはロブスター？」

083.

　でも今日のところは失礼するわと言い出したウィンディを、桧山は外まで見送りにでた。彼を振り返ってウィンディはくすくすと笑った。
「……なんですか？」
「すてきねえ、あなた」
「は？」
「とってもわかりやすいわ！　なんでも顔に出ちゃうもの。そう言われたこと、ない？」

　桧山はぐっとつまった。ある。
　ウィリアムス弁護士、新城社長、おやじたちに近い、または上の年代はみな同じことをいうと思っていた。いわく、「きみはわかりやすい」

　なぜ同じことをいわれるのかわからず、ずっと聞き流してきたがその理由がやっとわかった。心の動きがすべて表情に出てしまうらしい。
　それを少し年上の美女に――からかわれたように思え、自分でも表情がかわったのがわかった。
　ウィンディはそれをちらっと見て、またくすっと小さく笑った。

「だから。すてきだっていってるじゃない。褒めてんのよ、私は」
　車のキーを指先でもてあそびながらほうっと大きく、楽しそうな息を吐いた。
「こっちの大学に編入するんですって？　お金持ちで。立派なからだしてて。マスクもよくて。女の子たちがきゃあきゃあ言い合って遠巻きにしてそうじゃない？　いいわねえ！　ねえ、もてるんでしょう？」
「……」
「ふふっ。知った風なこというなって顔ね！　だったら、あなたの顧問を代行する弁護士には、もうちょっと正確なとこ、教えておいたほうがいいと思わない？　そうでないと、あなたの権利を守れないわ」
「……」
「今日はこれで帰りますけど、こんどゆっくり話しましょうよ。私もロブスターのおいしいお店を知ってるの」

　それだけ言うとウェーブのかかった黒いセミロングを一振りして車に乗り込んで行ってしまった。あとに甘いムスクの香りが残り、桧山はそれを吹き消すような大きなため息をついた。

「オーナー？」
　アイラが優しい顔をいくらか心配げに曇らせてホールで待っていた。桧山が安心させるように片方の唇をぎゅっとつりあげてそれに応えると、相手もほっとした様子をみせる。
「オーナー、お荷物はこれだけですか？　お部屋に運びますわ」
「いや、自分でやります。一週間後にいろいろ届くからその時はカヤに頼みますよ」

　短期の帰郷のたびに桧山はこのホテルを使っている。
　常時人が出入りしているから掃除が行き届いているし、併設のレストランの厨房はオーナーの好みをよく知っていてあらゆる注文に応えてくれる。気さくな夫と穏やかな妻の管理人夫妻は桧山とは親子ほど年が違うがそれぞれの立場をよくわきまえている人たちだ。

　つまり、このホテルは自分にとってマイホームのようなものなのだ、と桧山は改めて思うのだ。内装は健の亡き母の趣味なのだという。亡くなる前の年に改装したのだそうだ。

　――緊張と不安と……次はつむじ風か

　彼はしばらくベッドに仰向けにひっくりかえっていた。
　館内電話が鳴って、アイラが夕食の時間を尋ねてきた。桧山は宿泊客のあとでいい、と返事をした。
　少し眠ろうか、それとも散歩してこようか……
　ふとムスクの甘い香りを嗅いだような気がした。車でいっしょだったから香りが移ったのだろう。やおら起き上がると窓を全開にし、バスルームへ入って頭からシャワーを浴び、着衣を全部取り替えた。
　散歩してこよう。眠ったらろくでもない夢を見そうだ――
　ホテルのバックヤードを抜けると広い緑地帯を伴った川辺に出る。夕暮れの散歩にはもってこいの場所だ。

084.

どうしよう――とウィンディはうろたえた
へんだわ、わたし――
へんな感じ
胸がざわつきからだの奥がうずく

彼を初めて見たときからへんだった

いい男はたくさん知っている
頭も　性格も　からだも　顔も
じっと見つめ　絶妙のタイミングで目をそらすと　たいていの男はむこうからやってくる
彼らは神秘的な瞳の奥を　もっと覗き込みたい　もっと知りたいと思うのだ
そして　たいてい彼女のとりこになる
そうでない男がいたとは！

彼はウィンディの目を受け止めながら見返してきた
その視線に耐えられずにウィンディは自分から目をそらしてしまった

こんなバカな――と思った
この私が――
目をそらすなんて――！

自分よりもいくつも年下の　裕福な学生、か

きっと青くて　身勝手で
世の中のことも　女のことも　ろくに知らないだろうと
この自慢のまなざしでからかってやれば　あっけなく落ちるだろうと思っていた

だが　あまつさえ彼は平気で見返してきて　微妙な表情をみせた
それは――押し殺した拒否の色だった
恥辱のあまり　ウィンディは全身がかっと燃えるのをおぼえた
強烈なプライドはわなわなと震えた

なんとかして一矢報いてやらなければ　自尊心の痛みは治まりそうになかった
なんとかして彼を困惑させなければ　気持ちが治まらなかった

どうしてくれようか
思い巡らすと
胸がざわつきからだの奥がうずく

へんだわ
どうかしてるわ
なんだってこんなに彼のことが気になるの！？
今日会ったばかりなのに！？
ウィンディ、彼はただのクライアントじゃないの！？
でも　でもこの昂ぶりはただごとじゃないわ
これ――そうよ　きっと　運命的な出会いなのよ

私たちは巡り会ってしまったんだわ

ケンにそのことを教えてあげなくちゃ――私が――

085.

老ウィリアムスは、週に一度は事務所に顔を出し近況報告するよう、桧山にいいつけてある。小言の多いウィリアムスに会うのはいつも気がすすまないが、気のすすまない要素がさらに増えた。

ほかでもない、若手弁護士のウィンディ・サトウの存在だ。

9月の終わりにウィリアムス親子が長期出張から戻った時点でウィンディに臨時に与えられた仕事はすべて老ウィリアムスに戻った。その間およそ一月、ウィンディは様子見と称して毎日のようにホテルに通ってきたのだ。有能なウィンディは弁護士のほかにもいくつか資格を持っていて、引っ越してきたばかりの桧山にとっては利用のしがいがあったがそれも最初の一週間ばかり。

「用のある時はこっちから出向くから」

暗に、毎日来ないでくれと言ったのだがウィンディは聞く耳持たず、うんざりした桧山はこっそり大学の寮に入ろうかとさえ考えた。しかし居心地のいいマイホームにいながら距離的にそれほど遠くない寮に入るなどばかげている。それに、南半球はまもなく夏休みだ。
逃げてたまるものかと、ほとんど意地で、ウィンディの連日の来訪を受け流すことにしたのだった。
ウィンディの方は一時はあからさまに不愉快そうな顔をしていた健が徐々に素直になってきたのを喜んでいた。
（だって、わたしたちはそうなるべき運命なんだもの。あたりまえよ）

*

彼女の思惑はさておいて。

老ウィリアムスには桧山家の様々な資料やら荷物やらを預けてある。それらが資料室を一部屋占領していて、資料室賃貸料は顧問料と相殺されている。というわけで、この部屋には好きなだけ入り浸って中からカギをかけ、ひとりでいられる。
ここにいる時は声をかけないでほしい、事務所側にはそう申し入れてある。おかしな話だが、誰にもじゃまされずに作業に没頭できる場所が、ウィンディのお膝元だった。

とにかく、父のこと、祖父のことを知らなければならないと思ったのだ。十二月、大学が夏休みに入って、慌ただしい生活がひと段落し、ようやくその時がやってきた。開放的な夏休みには程遠いが、過去のことやら未来のことを頭から追い出したい気持ちもあった。

いろいろなものがランダムに段ボール箱に詰め込まれている。なにしろ、個人的なものなので整理はされていない。それは後継者である健の仕事だ。
自分自身の知られざる過去が暴かれるような、スリリングなような気が滅入るような、なんともいえない心持ちの作業である。

曽祖父母のパスポートなんてのが出てきて、写真をみて驚いた。
百年前のだが、曽祖父はいっしゅん、日本の養父・善人（よしと）氏かと思ったくらい、よく似ている。お世辞にも美男子とはいいがたい、いかついタイプの貌。正弘なんかはこれをもっとずっと穏

やかに丸く、緩くした感じで、遠い遠い親戚なんだそうだが、彼らの間に血の繋がりを感じずにいられない。
それにしても――この人の子孫がオレなのかと、しばし呆然としたくらいショックだった。なにがどうなれば自分のような……日本人離れした……子孫につながるんだろう……
曾祖母は……梅の花のような印象を覚える。パスポート取得は曽祖父の七年後。ひとりで海を渡ったのだろうが、二人の間にどんなドラマがあったものやら。

善人（よしと）氏には頭があがらない。健はそう思う。縁もゆかりもない、孤児となった幼児を成人するまで育ててくれたのだから。

十七年前。善人（よしと）氏が勤務する自治体が南オーストラリア州マウントガンビア市と姉妹都市提携を結ぼうと事前調査のために現地を訪れていた。善人（よしと）氏はその一員だった。マウントガンビア市には国道一号線、別名プリンセス・ハイウェイが通っている。この道路で若い夫婦が乗った車がトレーラーに追突され、車は大破、夫婦は死亡した。そのニュースがTVで流れた。

「まさか南半球の端っこへ来て『ヒヤマ』という名を聴こうとは思わなんだ」、と善人氏は言った。
「つくづく、偶然とは恐ろしいと思った」と。彼には、遠い親戚に昔渡豪した者がいると、なにかの機会に耳にした記憶があったのである。だからまったく縁もゆかりもなかったわけではない。
すでに三人の子がいた義人氏だったが、
「三歳だって！？　正弘と同い年じゃないの！　かわいそうに！　そっちに面倒みてくれる親族がいないんじゃ、なおさらだ、うちで面倒みようじゃないの！　三人だろうが四人だろうが、たいして変わんないよ！」
国際電話の向こうの夫人の力強い言葉に押されて、亡くなった若夫婦の遺児は義人氏に抱かれて日本へ渡った。ちなみに姉妹都市提携は残念ながら身を結ばなかった。

年の近い兄二人と弟一人という環境で長じた健は、成長するにつれ彼らとの違いが際立ってきた。見た目がぜんぜんちがうのである。そのことが原因で周囲の要らぬ憶測を呼び、健本人の耳にも入り、いじめられもした。
健と正弘が中学生になったとき、義人氏は家族全員集めて健の出生と彼がいずれ本国へ帰らなければならない事情を打ち明けた。多少の波紋とそれぞれの若干の葛藤を呼びはしたものの、だからといって、桧山家はびくともしなかった。むしろ、皆が納得したのだった。

ある意味オレは、まったくの未知の世界へ足を踏み入れるという、曽祖父と同じ道を辿ったことになるのかもしれない。

そんなことを考えながら、曽祖父が日本を出、シンガポール経由でオーストラリアへ入国したという証拠のパスポートを眺める。

*

気を取り直してパスポートは脇におき、様々な書類だの書き付けだのをひっくり返しているうちに、いろいろわかってきた。

たとえば、正太郎-絹子夫妻の子である正悟氏の結婚相手、つまり健の祖母はドイツ人女性で、彼女、ヨハナはエーデルシュタイン家の一人娘で祖父はエーデルシュタイン家に婿養子に入った形だ。やがてヨハナが亡くなり、夫である正悟が財産を継いだ。正悟の一人息子・光一はコウイチ・エーデルシュタイン・ヒヤマが正しい名前だ。

へえ、と感心しつつ、健は窓の外に目をやる。すると……

（すると、俺のミドルネームは、母親の姓、ということ？）

そう、健にはミドルネームがあった。祖母の姓を入れればもっと長くなるが、健と桧山の間に、ひとつだけ。アウレア、と。

しかし、父光一も曽祖父同様、謎めいていた。日記というものが、ほとんどない。健の生年までのおよそ十年ほどがまったく空白なのだ。

２・「Homecoming」

３・「Domestic transfer lobby」へ続く

あとがき

さて、この話は前作『nanako-fifteen』同様、かな～り前に一度書いたものでして、その時はなんといいますか、女性向けを意識してたのです。

ウィンディは、昔書いたキャラクターでして、今は書けないし、書かない、だろうなあ。でも読み返してみたらけっこうおもしろかったのでご登場願いました。

今現在の読者さま方の性別、年齢層などまったくわからないのですが、もしや…当時の読者さまもいらっしゃるのでは…と思わなくもない。でもまあ、当時とは作品タイトルもペンネームも違いますし、そもそも書いてる人間が違います。
今はどういった読者層を対象にしている、ということがありません。筆者の書きたいものしか書いてないです。読んでいただいてる皆さまにはほんとに感謝です。

それと、今後のことをちょこっとだしておきましょうか。
近々、レル・ヴァリスが登場します。お楽しみに。

2025年2月25日

奥付

リ・コンストラクション

第二章 Homecoming

2025年3月1日 初版発行

著者　　峯村 明　E-mail

表紙素材　「イラストAC」

制作　　Puboo

発行所　　デザインエッグ株式会社